In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	文献探訪 ： 『初年次教育 ： 歴史・理論・実践と世界の動向』 ： 『一年次(導入)教育の日米比較』
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 5 巻 1 号, p.117-119.
Issue Date	2007-08
ISSN	1349-2152
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	濱名篤・川嶋太津夫(編著)『初年次教育 ： 歴史・理論・実践と世界の動向』丸善 2006 年 ： 山田礼子(著)『一年次(導入)教育の日米比較』東信堂 2005 年
DOI	10.24544/ocu.20181227-010

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

文献探訪　Book Review

西垣順子（大学教育研究センター）

濱名篤・川嶋太津夫（編著）
『初年次教育―歴史・理論・実践と世界の動向』
丸善　2006年

山田礼子（著）
『一年次（導入）教育の日米比較』
東信堂　2005年

本号では、初年次学生の学士課程教育への円滑な移行を進めるための教育プログラムである初年次教育（first year experience）に関する文献を紹介し、その後に初年次教育において活用できるテキスト（教科書）を紹介する。

初年次教育について包括的に解説した既存の和書は、**濱名篤・川嶋太津夫（編著）『初年次教育―歴史・理論・実践と世界の動向』**と**山田礼子（著）『一年次（導入）教育の日米比較』**の2冊であろう。前者では初年次教育の理論的枠組みと歴史的展開が明確に示されるとともに、国内外の初年次教育の実践も幅広く紹介されている。初年次教育とは何であるのか、なぜ必要なのか、どのような効果があるのかを改めて基盤から考え直すとともに、将来的な展望を探る上で必読の書である。

他方の『一年次（導入）教育の日米比較』は、大学教育の大衆化を早く経験しているアメリカの初年次教育の歴史と実践事例を紹介するとともに、日米それぞれ1000を超える大学（学部）に送付された調査票に基づく調査結果をもとに、日米の一年次教育の実態を分析している。米国での初年次教育の様々な方法論や評価法を知ることができる上に、日本の現状を一歩引いて見直すためにも有効な書である。

『初年次教育―歴史・理論・実践と世界の動向』が理論的枠組みを明確に示した上で、実践事例の紹介と検討を行っているのに対して、**『一年次（導入）教育の日米比較』**は大規模な調査結果に基づく検討が含まれることも背景にあってか、両者では初年次教育として捉える枠組みが多少異なっている。前者は初年次教育を学士課程教育全般への移行を目指す汎用的な教育としてより厳密に捉えているのに対して、後者は初年次学生向け教育一般を広く視野に入れている。そのために、後者の概念整理が曖昧であるという批判もあるようだが、大学に対する調査を行う上では、初年次教育をあまり限定的に捉えすぎると、「実施していない」という回答ばかりが多くなり、せっかくの大規模調査の意義が非常に薄くなってしまう危険があることを考えると、このような捕らえ方にも妥当性があると考える。

むしろ、これから各大学で初年次教育のあり方を検討する上では、両書それぞれの視点を生かし、きれいに整理された理想的な理論的実践的枠組みと、実際の姿の両方を視野に納めつつ、自らの足元を見直しながら初年次教育システムをデザインしていくことが重要なのではないだろうか。

ここで、初年次教育のための授業で活用できるテキスト（教科書）をいくつか紹介する。

比較的早くに出版されたものとしては、2002年に出版された**『大学生からのスタディ・スキルズ　知へのステップ』（学習技術研究会編、くろしお出版）**と**『大学基礎講座――これから大学で学ぶ人におくる「大学では教えてくれないこと」――』（藤田哲也編、北大路書房）**を挙げることができる。どちらも大学で学ぶ上で必要な学習スキルを解説したものである。前者はノートテイキング、ライティング、情報検索スキル等の、大学で学習する上での行動的なスキルを新入生向けにわかりやすく解説している。それに対して後者は、編集の藤田氏が認知心理学者であることもあってか、スキルの解説とともに「どのように頭を使うか」の説明に重点が置かれているという特徴がある。なお、両者とも姉妹版と改増板が相次いで出版されている。前者には姉妹版の**『プラクティカル・プレゼンテーション』（上村和美・内田充美著、くろしお出版）**が2005年に出版されている。また後者では、**『大学基礎講座　改増版　―充実した大学生活を送るために―』（藤田哲也編、北大路書房）**が2006年に出版された。『大学基礎講座』の副題の変化が、この4−5年の間の

日本における初年次教育の普及状況を象徴している。

さらに2006年には、玉川大学コア・FYE教育センター編で**『大学生活ナビ』（小原芳明監修、玉川大学出版部）**も出版された。玉川大学はFYEセンターを設置して初年次教育に力を入れている。本書はアメリカの初年次教育研究の第1人者であるRandy Swing博士（濱名・川嶋氏編集の**『初年次教育』**にも論文を執筆）も加わって作られた本格的なテキストである。先に紹介した2冊が、大学教育・大学授業に学生を導入する上で必須事項となるアカデミックスキルの獲得支援に重点を置いているのに対して、『大学生活ナビ』は学士課程教育のあり方そのものを視野に入れた初年次教育テキストとなっている。具体的には、アカデミックスキルや生活習慣指導に加えて、卒業後を見越したキャリアデザインを考えさせたり、時事問題を考えさせたりボランティア活動に取り組ませたりと、学生が自分は今どこに立っていて、どこへ行こうとしているのかを意識させようとしている。

学士課程のあり方全体や卒業後も視野に入れた初年次学生向けのテキストとしては、他に**『大学生の学び・入門ー大学での勉強は役に立つ！』（溝上慎一著、有斐閣）**と**『大学生の勉強マニュアルーフクロウ大学へようこそ』（中島祥好・上田和夫著、ナカニシヤ）**を挙げることができる。

『大学生の学び・入門』は、「できない学生、やらない学生を基準にどうしたらと考える教育論は、私はダメだと思う」と言い切る著者が、あえて高い目標を学生に課している。「黙々と勉強されても困る」「自分を発展させる勉強をせよ」「将来の職業等の社会や現場と大学の勉強をつなげるのは自分自身だ」などなど、学生に投げられる課題はなかなか厳しい。同時に、著者自身の学びや研究の試行錯誤も紹介されており、2名の学生のレポート（体験談）も掲載されている。つまり、目指すべき高い目標が示され、その手段はあくまで先輩達による「例」として示されているのである。学ぶの語源は「まねぶ」、つまり真似をすることである。**『大学生の学び・入門』**は、それを読んだ学生が、先輩達を黙々と真似るのではなく、真似もしながら、自分自身の学びを振り返りつつデザインするツールとして、有効に使えるテキストだろう。

『大学生の勉強マニュアル』は、タイトルから想像されるようなマニュアル本ではない。「フクロウ大学ハタオリ学科」に入学したホサト君の学生生活を描いているが、第1章で入学したホサト君が第3章ではもう上級生になっており、第4章では卒業研究に取り組んでいる。つまり、初年次から、卒業研究やさらには大学院生・教員といった研究者の世界まで、大学を広い視野で新入生に見せているのである。学習スキルや研究スキルに関する記述もそれなりに織り込まれているが、本書のメインテーマは「（理想どおりにはいかないことが多くあっても）大学に学ぶものが、『しかたがない、誰かに任せた』とは言わないでほしい」という、学生に対するメッセージである。つまり、本書で記述されているスキルの習得は、大学での適応や成功のためだけではなく、使命感をもちそれを実現するというより広い目的を視野に入れていると言える。

大学教育の大衆化というのは、大学にとっては確かに大変なことである。その一方で、社会にとっての意味は何であろうか。単に長く学生生活を送る人間が増えるという意味なのか。それとも、「誰かに任せた」と言わずに、自ら状況を拓くことのできる人間の数が増えるということなのか。初年次教育は大衆化した大学での新入生への対応という側面から広まったという経緯もあるが、初年次教育が広がっていく中で、その目的や視野がどのような展開を見せるのか、今後の行方が注目されるところである。

今回紹介の文献

①藤田哲也著

『大学基礎講座ーこれから大学で学ぶ人におくる「大学では教えてくれないこと」ー』

（北大路書房、2002）

②藤田哲也著

『大学基礎講座　改増版　ー充実した大学生活を送るためにー』

（北大路書房、2006）

③学習技術研究会
『大学生からのスタディ・スキルズ　知へのステップ』
（くろしお出版、2002）
④上村和美・内田充美著
『プラクティカル・プレゼンテーション』
（くろしお出版、2005）
⑤中島祥好・上田和夫著
『大学生の勉強マニュアルーフクロウ大学へようこそ』
（ナカニシヤ、2006）
⑥小原芳明（監修）玉川大学・FYE教育センター（編集）
『大学生活ナビ』
（玉川大学出版会、2006）
⑦溝上慎一著
『大学生の学び・入門ー大学での勉強は役に立つ！』
（有斐閣、2006）